

STAGE+を楽しむ(348)(HP 収載)

—ザルツブルク音楽祭 1991 年—

1. 始めに

前報(347)に引き続き、STAGE+のザルツブルク音楽祭 1991 年の演奏の試聴を実施します。

2. 試聴音源

今回は、前報(347)に引き続きザルツブルク音楽祭 1991 年の演奏を選びました。ホルスト・シュタインが振るシュターツカペレ・ドレスデン〜ニッカネンを迎えてモーツァルテウム、ザルツブルク音楽祭 1991 年

収録日: 1991 年 8 月 11 日

1991 年のザルツブルク音楽祭はモーツァルト没後 200 年の記念イヤーで、小澤征爾・指揮の《イドメネオ》を始め様々な人気オペラが集中的に上演されました。そのうち《後宮からの逃走》を振ったドイツのホルスト・シュタインはシュターツカペレ・ドレスデンを指揮してコンサートのステージでも好評を博しました。こちらの映像はそこから、アメリカの若手クルト・ニッカネンをソリストに迎えたヴァイオリン協奏曲第 3 番に加えて、初期の第 20 番と後期の傑作である第 36 番《リンツ》の 2 つの交響曲をピックアップしたものです。決して派手ではありませんが、呼吸するように自然で滑らかなシュタイン節で紡がれた安定のモーツァルトをご堪能ください。

ソリスト:

ルート・ツィーザク (ソプラノ)、クルト・ニッカネン (ヴァイオリン)

演奏:

シュターツカペレ・ドレスデン

指揮:

ホルスト・シュタイン

曲目:

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト 交響曲第 20 番ニ長調 K. 133

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

《私は行きます、でもどこへ》 K.583

ルート・ツィーザク(ソプラノ)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

ヴァイオリン協奏曲第 3 番ト長調 K. 216

クルト・ニッカネン(ヴァイオリン)
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

《私のうるわしい恋人よ、さようなら》 K. 528

ルート・ツィーザク(ソプラノ)
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

交響曲第 36 番ハ長調 K. 425 《リンツ》



3. 試聴の経過

前回に引き続き、これまでに実施してきた対策に加えて、アースアキュライザーの活用(6)で報告しましたようにアースの再構成を実施し、AV ドーナッツも使用しています。さらに、スピーカーアキュライザーのマイナス端子への Crystal EpY-G の接続を継続し、PC の仮想アース Crystal E Jtune を連結しています。

また、ルーター→スイッチングハブ間の LAN 接続に OPT ISO BOX を適用し、OPT ISO BOX の AC アダプターの DC ケーブルに FX Audio の Petit Susie Solid State を介在させてスイッチング電源からのノイズの低減を図っています。

今回、スイッチングハブ→PC 間 LAN 接続は、LAN iPurifier Pro の交換後に元に戻しています。

今回は、PC の受信からクロック入力 of 修理済の Brooklyn DAC+ に送り出しています。また、PC と Brooklyn DAC+ の間の介在は、iPurifier USB からインフラノイズの USB アキュライザーに交換しています。クロック入力は ABS-7777 を適用しています。

モーツァルトの交響曲第 20 番は、あまり聴く機会がない曲ですが、親しみやすく爽やかな曲です。

《私は行きます、でもどこへ》は、ツィーザクのソプラノがのびやかに歌います。ヴァイオリン協奏曲第 3 番は、お馴染みの曲で、ニッカネンのヴァイオリンが丁寧

な演奏で優雅に歌います。

《私のうるわしい恋人よ、さようなら》は、別れの情感を込めてツィーザクが切々と歌います。

交響曲第 36 番ハ長調《リンツ》は、お馴染みの曲で、構成のしっかりしたこの曲らしいオーソドックスな演奏です。





4. まとめ

これまでに実施してきた対策に加えて、アースアキュライザーの活用(6)で報告しましたようにアースの再構成を実施し、AV ドーナッツや Crystal EpY-G や PC の仮想アース Crystal E Jtune を連結し、LAN 接続に OPT ISO BOX と電源交換した LAN iPurifier Pro を適用し、ABS-7777 からのクロック入力の Brooklyn DAC+に送り出し、PC と Brooklyn DAC+の間には USB アキュライザーに交換した結果、交響曲、ソプラノのアリア、ヴァイオリン協奏曲のオールモーツァルトプログラムのザルツブルク音楽祭の雰囲気味わえました。

以上